

佐藤春夫文学に見る多文化共生社会

—『美しき町』を例として—

范 淑 文*

1. はじめに

竹村牧男氏は、「共生学」の課題と展望」という文の中で、共生についての定義を下し、多元化の共生社会において問わねばならない問題について、次のように述べている。

今日、特に「共生」が問題になってきたことの背景には、何があるのでしょうか。それには、いくつかの要因があると考えられるが、(中略)全世界の一元的な支配は終焉して、地球的にも地域的にも多元化した社会になり、それゆえにさまざまな局面で、抑圧や差別、支配や攻撃、侵食や侵害、不公平・不平等、等々の問題が顕在化し、これらの問題に真剣に対処しなければならなくなってきたということがあろう。¹
(下線筆者、以下同)

上掲した氏の見解に従えば、「一元的な支配は終焉」しなければ、多元化した共生社会は成り立たず、その多元化した共生社会(勿論経済や文化、価値観などさまざまな面が含まれる)では、それぞれ個々の文化や価値観などが尊重されるべきであることは改めて言うまでもない。「抑圧や差別、支配や攻撃、不公平・不平等」の問題が解決できれば、その社会にいる人々は楽しく、幸せに生活できる。言い換えれば、人々の幸福や楽しい生活が、多元化共生社会の構築の最終目標と言えよう。

そうした人々の幸福や楽しい生活という点から考えれば、ユートピアや理想郷もまた一種の多元化共生社会と見なすことができよう。つまり、多元化共生社会の構築は今日に始ったものではない。時代を遡っていけば、中国の陶淵明の『桃花源記』にそうした社会の原点を見出すことができる。場所を日本に移すと、例えば、ユートピア小説が一つのブームであった時期に創作された佐藤春夫の『美しき町』などは、ユートピア構築の意図のもとで考案された作品²と思われ、一種の多元化(多文化)共生社会の青写真の試みと捉えられないこともない。但し、その多文化共生社会の構築において、上掲した竹村氏が指摘した「全世界の一元的な支配は終焉し」たか、また「抑圧や差別、支配や攻撃、侵食や侵害、不公平・不平等」などの問題はなかろうか、などは議論する余地がある。よって、小論では竹村牧男氏の「共生学」説に従いながら、当時の社会状況を念頭において、佐藤春夫の『美しき町』で構築されている「美しい町」は多文化共生社会として成り立つか、多文化共生社会として欠如している点は如何なるものかなどの解明を試みてみる。

2.1 「美しい町」にみる多文化の共生

『美しき町』は、画家E氏という青年が旧友である川崎禎蔵に誘われて「美しい町」作りの計画に参加していた経過を「作家」である「私」を通して語ったストーリーである。この「美しい町」作りのプロジェクトには「私」である画家E青年

*台湾大学教授

のほか、後にTという老建築技師も加わり、計画の発起人である川崎の意向に従いながら、夜な夜な三人が集まっては、語り明かした三年間を綴ったものである。しかし、「美しい町」の模型が漸く完成する直前に、この話を持ち込んできた川崎禎蔵は「私のおやぢも山師であつたが、山師の息子がまた山師なのだ」と、「美しい町」作りという計画が最初から一つの空想だったことを告白した後、ドイツへ立ち去った。残された画家E氏と建築技師であるT老人は戸惑いながらその空虚感を味わうところで物語は幕を閉じる。

『美しき町』のユートピア説の由来は、「美しい町」の発起人である川崎が「時々ドリイミイな目を上げてその地図の上を眺め入つてゐることがあつた。それに又時々彼は本を読んで居た。それはウキリアムモリスの「何処にもない処からの便り」といふ本で、それを彼は余程好きであつたと見える、何時でも読んで居たから。」(p.399)という描写によるものであつたのは言うまでもない。佐藤春夫がそれを意識しながら書いていたと思われるほど「美しい町」はウィリアム・モリス(以下、モリスと略称)の『ユートピアだより』³に描かれている世界とかなり似通っているが、小論の重点は両者の相違点ではないため、ここでは詳しい比較を省き、川崎がこだわっている「美しい町」の住居者の条件に焦点を絞り、多文化の共生がどこまで有り得るだろうかという問題点を明らかにしてみる。川崎に制限された「美しい町」の住居者の資格について、E氏を通して語られた内容を次のように箇条書き式に掲げておこう。

- (1) 私の拵へた家に最も満足してくれる人。
- (2) 互に自分達で拵ひ合つて夫婦になつた人々。さうして彼等は相方とも最初の結婚をつづけて居て子供のある人たちでありたい。
- (3) 彼自身の最も好きな職業を自分の職業として拵んだ人。さうしてその故にその職業に最も熟達して居てそれで身を立ててゐる人。
- (4) 商人でなく、役人でなく、軍人でないこと。

(5) その町のなかでは決して金銭の取引きをしないといふ約束を守つて、(中略)

(6) そこの人たちは必ず一疋の犬を愛育すること、若し生来犬を愛しない人は猫を養ふこと。犬をも猫をも嫌ひな人は小鳥を飼ふこと。
(p.391)

先ず、(1)にある「私の拵へた家に最も満足してくれる人」というのは、つまり、価値観、芸術観、人生観などが近い人でなければ受け入れられないのは、モリスの『ユートピアだより』のみならず、古今東西を問わず、あらゆるユートピア世界や桃源郷の基本条件と言えよう。これを単純に考えれば、こうしたユートピア世界の完成——多文化の共生など以下の条件——に協力的な人を指しているため、基本的には多文化の共生に背いていないと見なせるだろう。

次に、(3)に定められている職業に関する規律であるが、モリスの「精力にあふれながらゆったりと休息するといった、わたしたちの生活、つまり、仕事が楽しみで、楽しみはまた仕事だ」⁴という点に該当するであろう。ただし、モリスの『ユートピアだより』では、作家や馬車の御者や船の船頭や織物工や宿主などの職業にそれぞれの住民がついていながら、季節の乾草刈りという田圃仕事にはすべての住民が参加し、乾草刈りを含め如何なる仕事をもみんなが楽しんでゐる描写が随所に見られる。まさに「抑圧や差別」、「不公平・不平等」のない共生社会そのものであろう。一方、「美しい町」の(3)の項目には仕事を楽しむような明白な叙述は見当たらないが、「最も好きな職業を自分の職業として拵」ぶことができ、「その職業に最も熟達して居」るなら、それぞれ職業を楽しめるはずであろう。となれば、職業の差別も不平等もなく、つまり、個々の才能が認められ、どの職業も尊重される点は、多文化共生の主旨に符合しているのは明らかである。

続いて(4)と(5)は、さらに職業の内容について具体的な制限が盛り込まれている。「商人でな

く、役人でなく、軍人でない」と一部の職業をはっきり排除しているのは、「美しい町」の発起人である川崎の意図が伺えよう。「軍人でない」とはつまり、戦がなく、平和であることの保障に等しい。「役人でない」条件は、管理されることがなく、上下関係も貴賤の区別もない、平等な社会を築こうとする狙いであろう。そして、商人への拒否は(5)項目の「町のなかで決して金銭の取引をしない」という項目とは表裏一体の表現と言えよう。東洋の桃源郷においても西洋のユートピアでも、金銭による商いの気配は一向に感じられない。それは恐らく、金銭による取引は、それぞれのもの価値などを決めたり自分の利益を考えざるを得なくなるため、その土地にあるものがみんな共有のものであるという理想郷の考えに背いているからであろう。一方、「美しい町」における商い禁止は、そうした家族同様の関係からの発想というより、金銭による取引がもたらす不誠実や詐欺などを防ぐ——個々の権益を守る——ための考えと捉えるべきであろう。こうした個々の生活に「侵食や侵害」のないように、公平性を考慮する「美しい町」の建設はまさに多文化共生社会の構築そのものであろう。

上述のように、「美しい町」の住民に発起人である川崎が下した六つの条件のうち、(1) (3) (4) (5)の四つは多文化共生社会の要素と重なっているのは明らかである。しかし、残りの(2)及び(6)は、多文化の共生を反映しているか、疑問である。

2.2 「美しい町」で抑圧される文化

「美しい町」の住民として、定められている条件(2)「互に自分達で結び合つて夫婦になつた人々。さうして彼等は相方とも最初の結婚をつづけて居て子供のある人たちがでありたい。」及び、(6)「その人たちは必ず一疋の犬を愛育すること、若し生来犬を愛しない人は猫を養ふこと。犬をも猫をも嫌ひな人は小鳥を飼ふこと」は、一見住民

の立場になって考えているようであるが、結論から言えば、それは必ずしも多文化の共生を促しているとは言い切れない。

まず、(2)の結婚に関する考え方であるが、「互に自分達で結び合つて夫婦にな」というのは、自由恋愛結婚が認められていなかった古い伝統に対する批判、または男女の自由恋愛や結婚の自由、所謂女性への尊重の唱えと捉えられ、共生社会に改善しようとする姿勢を構えていると言える。しかし、後半の「相方とも最初の結婚をつづけて居て子供のある人たちがでありたい。」という規律は一体如何なるものであろうか。「最初の結婚」とは、夫婦の離婚に対する反対であり、男性の浮気にどうすることもできなかった当時の社会への批判や女性の見方のように見えるだろうが、例えば片方(男性が圧倒的に多かったが)の理不尽や無責任、あるいは暴力などに我慢できず別れようとする配偶者への「抑圧」を招いたりすることになり、第一節に掲げた竹村牧男氏の「共生学」に背いているのは明らかである。夫婦に関する規制は、それのみならず、「子供のある人たち」という要求も加えられている。封建社会時代においては、子供の有無は夫婦関係が円満か不和を左右するといっても過言ではないほど重要な要素であり、子供を生むことが女性の責任とされていたし、女性の存在価値の一つと見なされていたのも事実であった。とはいえ、住民の幸せや楽しい生活を主旨とする「美しい町」の住民に強制的に子供を生ませようとするのは、女性(あるいは男性)の意志を「抑圧」しようとする行為と思われ、多文化共生社会のモットーに背いていると言わざるを得ない。

さて、最後の(6)の「その人たちは必ず一疋の犬を愛育すること、若し生来犬を愛しない人は猫を養ふこと、犬をも猫をも嫌ひな人は小鳥を飼ふこと」という項目に目を向けよう。犬か猫、さもなければ小鳥を「必ず」「愛育」する、という住民のライフスタイルへの要求である。人間の生活空間に存在する犬などの生き物に関しては、陶

淵明の桃源郷では外地からの客を見たら犬が主に知らせるか歓迎する証として吠えたり、また客の持て成しに村の人達が鶏を用意したりすると語られている。犬や鶏などの動物は謂わば、生計を立てる目的として盛り込まれ、一種の裕福の象徴と見なす事もできるのである。一方、佐藤春夫の『美しき町』における犬や猫、小鳥などの生き物には住民の生計にかかわっていると思われる描写などは見当たらないし、裕福の象徴も見出せない。

ここでは、都会から郊外に移り住んで生活する『田園の憂鬱』の主人公を想起して犬や猫などの生き物の位置づけや役割を考えてみよう。都会の生活に厭きた主人公が妻及び荷物搬びの雇われ女に伴われるほか、猫と二匹の犬を連れて郊外の一角に住処を定め、自然との対話を味わおうとする、というのが『田園の憂鬱』の粗筋である。ところが、都会の煩いで郊外に移った主人公は隣家との付き合いのみならず、妻とのコミュニケーションすらも円滑に進まず時々苦しんでいるが、犬を散歩に連れて行き、犬のために蝗を一生懸命に取ろうとしたり、猫や犬が近所に迷惑をかけた場合でも、部屋を汚した時にも叱らず、可愛がったりしている。つまり、人間との付き合いが苦手な主人公にとっては、犬や猫は孤独で荒んでいる彼の心の慰めになっていると考えてよかろう。妻との会話さえも円滑ではないが、一方、犬と野原を散歩している時や夜中犬の安否を心配している主人公は生き生きしているし、ペットへの愛情が感じられるのである。中村光夫氏は「『田園の憂鬱』の全篇は、ただ主人公の「彼」の獨白に終始します。あるひは彼と自然との対話といつてもよいかも知れません。(中略)自然との「主観的」対話に盛られたイメージの豊富さも、平凡な田舎の季節の推移を、交響樂に似た効果で、詩化してゐます。」⁵と語り、全篇のモチーフを自然とのかかわりと見なしている。一方、原仁司氏は「春夫の芸術的感性は、一国の文明がもつ過去の〈歴史〉や〈伝統〉への血脈を求めるとともに、未来へ切り開き突き進まね

ばならぬ〈社会〉や〈他者〉との関係の、その双方を視野に納めながら、それらを総合しようとする姿勢を保持しつづけた。」⁶と、〈社会〉や〈他者〉との関係が春夫にとって最も関心を抱いていた問題だという見解を示している。社会や他者との関係の躓きが原因でそこを離れて「自然との対話」に心の安らぎを求めようと企てたが、他者とのかわりを完全に断ち切れないことを『田園の憂鬱』の主人公は十分に承知していたのであろう。そうした社会や他者との関係で悩んで心の安らぎの場を郊外へ求めたが、その人々の世界にも馴染めず、妻という他者との関係も好ましくない状況に陥った「彼は、犬や猫などのペットとの会話に安らぎを求める羽目になってしまったのである。

『美しき町』では、そのような役割りの犬や猫、或いは鳥などのペットを再び登場させている。「美しい町」の住民にペットを飼わせることは、つまり『田園の憂鬱』の主人公のそれを彷彿させ、一種の他者との関係の代行として位置づけられていると捉えられよう。その「美しい町」の住民として必ず飼わなければならない犬や猫、あるいは鳥などのペットは、住民の精神を安堵させる潤滑剤や心の慰めとして、その幸せな世界を構築していく任務が付与されていると思えるのである。しかし、「共生学」の観点から考えてみれば、他者との関係にさほど苦悩していない人、あるいは多少悩んでいても犬などペットに頼ろうとは思わない人に、ペットを飼わせるのは個の自由への「侵害」、あるいは一種の「支配」とも思われ、正に多文化の共生を妨害している考えではなかろうか。

3. 多文化の共生に破綻が生じている「美しい町」

『美しき町』の発表と時を同じくして、一九一九年に後藤新平を中心とする都市計画法が公布され、それに引き続き池田公爵を始め公爵たちが次々へと土地を公有地として手放したことによって、一九一〇年代の東京は急速な変貌を迎

えた。中沢弥氏はそうした社会変革や当時変わりつつある東京市民の生活パターンに注目し、佐藤春夫の同郷者西村伊作という素人建築設計者と『美しき町』の主人公川崎との類似性を指摘し、「夢のショーウィンドウを——あるいは郊外住宅の展示場！を都心につくるようなものなのだ。」⁷と、都市開発における「美しい町」の位置づけを見なしている。一方、高橋世織氏は『『田園の憂鬱』論』という一文の中で、当時電気の普及によって「文学青年等は夜型の生活にこの頃から入り、こうした新しい光に晒されたこの時代特有の、神経衰弱、不眠症等の精神的な近代病が瀰漫しはじめる。」と『田園の憂鬱』の主人公の内面を論じているほか、「紙製のミニチュア幻想都市『美しい町』の家々にも「微細な窓」から「自家発電」による燈が洩れるようになっていた。」⁸と、『美しき町』に描かれている町への文明の投影に言及している。両氏とも、近代化の下で構築される町や住民のライフスタイルの変化などに重点を据えながら『美しき町』の本質を論証している。近代化、あるいはそれによる変化に触れる際、外来の文化がもたらした衝撃やその受け入れ方などが常に伴われる。『美しき町』で描かれている「美しい町」の構築も、そうした近代化の下で進められるものであるため、多文化が如何なる形で共生できるかという問題を問わねばなるまい。が、上記の考察から、「美しい町」の構成には次のような破綻が露呈している。

(1) 中途半端な個の独立性

封建社会の因習を破ることを図り、結婚の自主権を唱えるのは個の意思の尊重であるが、「最初の結婚をつづけて居て」——言い換えれば、離婚の禁止——や、「子供のある人たち」（強制的な子供の生育）などは個の意思への「抑圧」につながり、個の価値観への「侵害」と見なすべきであろう。

(2) 共同体の全体性の欠如

「一疋の犬」などの動物を「愛育する」のは、余裕のある生活の示唆であるほか、『田園の憂鬱』

の主人公を彷彿させることを容易に連想することができる。共同体における個の存在に不安を感じたり他者との間に齟齬が生じたりした『田園の憂鬱』の「彼」も「美しい町」の住民も、犬や猫などの動物に精神の支えを求めようとしているのである。これは個への尊重、つまり個の存在を「共同体の全体と同じ価値を有している」共生の表れとも捉えられる。しかし、それと同時に「そこでは、個はただ自分勝手に、自分の意思のみにおいて共同体の存立に違背する方向でふるまうことはできない」⁹という面をも見落としてはならない。犬などの動物の「愛育」という個（あるいは少数）の他者観を共同社会全体に押し付け、賛同させるのは「自分勝手」同様の行為であり、「共同体の存立に違背」しているのではなからうか。それによって共同体の多様性や全体性には欠如が露呈せざるを得ないのである。

(3) 不可視な共同体全体の支配者

「私の拵へた家に最も満足してくれる人」というのは、「美しい町」の住民への第一条件として掲げられている。もちろん、同じ理想や価値観を持っている人々でなければ、一つの幸せで楽しい生活の場は成り立たない。とはいえ、「私の拵へた家」という表現にはすでに支配者の存在が物語られていると思える。のみならず、「美しい町」の発起人である川崎は更に、「各々の家々のうち側の窓が一様に又一目で見る事が出来る庭園を持たう」、「一つの家は、二階家で四十坪よりあまり以上の土地を費やしたくない」（p.398）とあるように、その家の造りや大きさなどを統一化しようとしている。「美しい町」の背後には全てを操ろうとする支配者が存在しているのは明白であろう。

「一元的な支配は終焉し」なければ、その地域の「多元化した社会」¹⁰は成り立たないという、竹村牧男氏の「共生学」理論によれば、不可視な共同体全体の支配者が存在している限り「美しい町」には多元化文化の共生は不十分であるとしか言いようがないだろう。

註

- 1 竹村牧男「『共生学』の課題と展望」, 竹村牧男・松尾友矩編『共生のかたち—『共生学』の構築をめざして』誠信書房, 2006, p.8.
- 2 『美しき町』の本質について、「『画家E氏が私に語った話』をE氏を中心化して読むと、画学生E氏が真の芸術家へと成長していく謂わば「教養小説」としての全貌が浮かび上がってくるのである」(『佐藤春夫「美しき町」論—芸術家E氏の修行時代—』『東京女子大学紀要論集』50(1), p.61-62) という、海老原由香氏のユニークな見解もあるが、吉田精一氏の「理想的な街を設計しようとする」(『春夫全集』6 解説, 講談社) という解釈以来、『美しき町』がユートピア建設譚の作品とする読み方が主流とされてきた。例えば、川端香男里『ユートピアの幻想』(講談社学術文庫, 1993.10), 井上健「佐藤春夫とエドカア・ポオ」(『大谷女子大学紀要』12(1), 1977.9), 芳賀徹「春夫邸の客間の一隅で」(『新潮日本文学アルバム 59 佐藤春夫』新潮社, 1999.9) など、ユートピア説につながる研究が挙げられる。
- 3 ウィリアム・モリス (William Morris 1834-1896) の“News from Nowhere”は「無何有郷の消息」や「何処にもない処からの便り」、「ユートピアだより」など幾つかの訳文があるが、小論では以下 松村達雄訳『ユートピアだより』(岩波書店, 1968) に従う。
- 4 ウィリアム・モリス, 松村達雄訳『ユートピアだより』岩波書店, 1968, p.368
- 5 中村光夫「田園の憂鬱」, 吉田精一監修『近代作家研究叢書 81 佐藤春夫論』日本図書センター, 1990, p.37
- 6 原仁司「佐藤春夫における絵画と自我の問題—「田園の憂鬱」成立の前景—」, 佐久間保明・大橋毅彦編『日本文学研究資料新集 23 佐藤春夫と室生犀星』有精堂出版, 1992, p.66
- 7 中沢弥「佐藤春夫のユートピア・ヴィジョン「美しき町」のアルケオロジー」『湘南国際女子短期大学紀要』4, 1997.2, p.23.24
- 8 高橋世織「『田園の憂鬱』論」, 佐久間保明・大橋毅彦編『日本文学研究資料新集 23 佐藤春夫と室生犀星』有精堂出版, 1992, p.70
- 9 竹村牧男「縁起と共生 仏教から見た共生の理論について」, 竹村牧男・松尾友矩編『共生のかたち—『共生学』の構築をめざして』誠信書房, 2006, p.37
- 10 註1に同じ。

テキスト

『定本佐藤春夫全集』第3巻, 臨川書店, 1998

参考文献

- 井上健「佐藤春夫とエドカア・ポオ」『大谷女子大学紀要』12(1), 1977.9
- ウィリアム・モリス, 松村達雄訳『ユートピアだより』岩波書店, 1968
- 海老原由香「佐藤春夫「美しき町」論—芸術家E氏の修行時代—」『東京女子大学紀要論集』50(1), 1999.9
- 川端香男里『ユートピアの幻想』講談社学術文庫, 1993
- 高橋世織「『田園の憂鬱』論」, 佐久間保明・大橋毅彦編『日本文学研究資料新集 23 佐藤春夫と室生犀星』有精堂出版, 1992
- 竹村牧男『共生のかたち—『共生学』の構築をめざして』, 竹村牧男・松尾友矩編, 誠信書房, 2006
- 中沢弥「佐藤春夫のユートピア・ヴィジョン「美しき町」のアルケオロジー」『湘南国際女子短期大学紀要』4, 1997
- 中村光夫「田園の憂鬱」, 吉田精一監修『近代作家研究叢書 81 佐藤春夫論』日本図書センター, 1990
- 芳賀徹「春夫邸の客間の一隅で」『新潮日本文学アルバム 59 佐藤春夫』新潮社, 1999
- 原仁司「佐藤春夫における絵画と自我の問題—「田園の憂鬱」成立の前景—」, 佐久間保明・大橋毅彦編『日本文学研究資料新集 23 佐藤春夫と室生犀星』有精堂出版, 1992